

葉

言

の

頭

卷

## 僧道の復興

「僧道地に落ちた」と嘆く声が、いたる處で聞かされます。然し嘆くばかりでは僧道は復興しません。まず実践することです。実践方法は色々あります。ともかくも礼拝行に徹することが第一です。三宝礼拝を正規の作法通り行なうことはいうまでもなく、朝夕の勸経のあとで家族一同、互に相い向って合掌唱題の礼拝をかわし、人との挨拶においても食事の時においても、この作法を必ず行なうことです。行住坐臥、語黙作々、四六時中、深く礼拝に徹して行くところ僧道は、おのずから復興されて参ります。信仰即生活というのも、ここに現成していきます。礼拝なきところに宗教はありません。特に法華經は常不輕菩薩の実践をもつて人間礼拝を説く宗教です。僧はたゞ何もいらず常不輕

菩薩の行を尊うとかりける（越後・良寛禪師）

|                    |      |    |
|--------------------|------|----|
| 卷頭の言葉・僧道の復興        | 1    |    |
| 身延を巣立った青年僧として      | 藤森觀象 | 2  |
| デクノボウの祈り           | 榎本蓮子 | 14 |
| <b>[我が出家の動機]</b>   |      |    |
| 孝道に生きぬく者           | 和田吉弘 | 31 |
| 靈鷲山と身延山            |      |    |
| 靈鷲山の仏舎利塔           | 日高白象 | 40 |
| 九州街頭布教紀行その2        |      |    |
| 明治の傑僧・山本日躰上人伝      | 編集部  | 59 |
| <b>[信仰相談室]</b>     |      |    |
| 青年よ・法華經の思想と祈りをもて   | 日高白象 | 48 |
| <b>読者の声</b>        |      |    |
| 教義説明・まことの愛情        | 小林白峰 | 30 |
| 鶯峰贊助会員と釈尊像の写真      |      | 75 |
| 身延山大学高校の新校舎と大講堂の建設 |      | 39 |
| 日蓮聖人遺文・六大部分        |      | 58 |
| 編集後記               |      | 76 |

表紙題字・身延山法主藤井日静院下

表紙写真・インド靈鷲山へ渡る身延山金剛の釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社・長藤原秀憲氏寄進

カット・身延山みのぶ教報編集部提供

# 身延を巢立った 青年僧として

我が行く道は

擊鼓宣令・但行礼拝

そして隨所に

本化の僧侶を

涌出拡充する

ことである



藤森觀象

## 身延山鷲峰会第一期卒業生

今年三月五日、身延山大学の卒業式がありました。卒業生の中には、数名の身延山鷲峰会員がいました。私も、その一人でした。

翌六日、卒業生は身延を巣立ち、出迎えの父兄、信徒と共に全国各地へと帰って行きました。鷲峰会卒業生は、身延の駅頭まで、在校中の鷲峰学生の擊鼓によって見送られました。発車のベルがなるや、擊鼓の法音は、いよいよさえて轟きました。

そしてその法音の中に、これまで共に堪え抜いて来た幾多の忍従試練の数々を思い起し、且つは今後、たとえ全國に分散しても、なお異体同心に、本化の鷲峰僧侶をもあけて、仏祖の願業に生き抜かんとする将来、更に倍化して迫って来るであろう忍

辭を推量するにつれ、見送る者も、見送られる者も、別離のきわ、涙のもよおさない者とてありませんでした。

鷲峰会は、昭和三十七年四月、布教部の日高上人が本山指令によって一ヶ年間、東京内地留学をされたあとを轟って、在学中の身延山大学高校の学生有志が、その年の夏休み、日蓮大聖人が文永十一年五月十一日、鎌倉から身延へと御入山された聖路を、逆にたどって、身延から鎌倉へ、更に東京へと攀轡(行脚)した、その行動より始まったものでした。

次の学生行脚布教は三月の春休み、私の故郷である信州長野県松本を中心とした中学生地区一円でした。

学生の自發的な行脚布教、それは学生の故郷の寺を縁として、その都市、その府県下を布教するよう申しあわせたものであり、そうするほかに布教のてだてもなく、またそうすることが最も効果的であったからでした。

日高上人の留守中の身延山で、学生有志が日高上人によって教えられたお題目の写経を始めました。毎月千枚のお題目を書いては、富士川で施餓鬼供養を行いました。その後、間もなく日高上人が、一年間のこれが学生の団結をかためて行きました。東京留学を終えて身延山に帰つて来られま

した。学生有志は正月四日、日蓮大聖人遊学研鑽の靈地である京都の比叡山横川常光院に詣で、これより京都、奈良、大和郡山そして福知山へと街頭布教を展開しました。

した。ここで学生有志が協議したことは、これまで学生が各個に発行していた蓮華と、いう機関雑誌と、鐘音という機関雑誌を統合して、全国の宗門青年のために鷲峰という機関雑誌を発行することでした。

そして発行責任団体を、これまでのような単なる身延山学生有志という漠然たるものではなく、明確なものとして表示する必要性に迫られ、機関紙の題名をそのまま取って、身延山鷲峰会という名称がつけられたのでした。

身延山鷲峰会、それは一年を経過した今日、はやくも宗門各種の青年運動の中でも、躍目すべき実行力をもったものとして、内外の注目を集めていますが、そのはじめは、瞻写版印刷のささやかな学生機関誌、鷲峰の発行責任団体名にすぎなかったのです。

然し、鷲峰といえば、お釈迦さまが法華經を説かれたインドの靈鷲山のことであり、我が国では日蓮大聖人が魂魄を留められた身延山のことです。

たる日蓮大聖人が魂魄を留められた身延山とを、本法華經で結ぶ時、この両山一体の縁を軸として、こゝにはじめて世界恒

久平和の基盤が定められるとするならば、その使命は、鷲峰会と名乗る我々にありはすまいか。少くとも我々は、その先駆者となるべきではあるまいか】

「僧道、地におちた今日、鷲峰会が、この使命に邁進する時、その僧伽の動向が、やがて宗門における本化の僧の蘇生復興の一いしづえとなつて行くようにならねばならない」

私たち学生は、燃え沸るような情熱を心に秘め、この大いなる使命に向つて、謙虚に折りました。

それは、その年の四月二十八日、立教開宗の聖日でした。私たちは静かに祖廟に集

ました。そして御廟塔中の大聖人の御尊靈に向つて、一人一大音声に誓願しました。

「私は、久遠実成の本師釈迦牟尼仏に帰依し奉り、本仏の法華經に帰依し奉り、鷲峰の僧伽に帰依し奉りて、行学の二道を勵み、仏祖の願業達成に身命を惜まざることを誓願いたします。」

爾來、唱題修行と講義の集いが、毎週一回行われるようになりました。この集いはお釈迦さま御在世当時の布薩会にちなんでウバワスターと名付けられました。またお題目厚經による施餓鬼供養が、従来通り毎月一回、つづけられて行つたことはいうまでありません。

次の学生休暇は夏休みでした。この時、本山から私達の行脚布教に対しても、正式に

身延山街頭布教別動隊という名称が与えられました。そして愛知県下の刈谷、豊橋、  
尾張一宮、名古屋、三重県下の四日市、奈  
良県下の大和高田、桜井、大阪府下の大阪  
布施、兵庫県下の三宮、神戸、龍野、姫路  
等々の関西地方五つの県下、十三都市にお  
いて果敢な街頭布教が展開されました。

藤原秀憲氏が、毎月の鷺峰の表紙印刷を、  
一切寄進されるようになりました。

秋深き十月二十六日、この日を期して一百日間、龍華日像上人の由比ヶ浜大荒行の芳触を舉って、祖廟靈山橋下、身延の寒流に身を投する水行が始まりました。

龍野では兵庫県西部四十三ヶ寺の寺院を  
結集して青年行学講習会が開かれました。  
炎暑と激労に倒れる学生は、七名も数え  
られました。

身延山街頭布教の生み親でもあり育ての親でもある岩間布教部長が、三月の松本布教につづいて、この時も、大阪以来、一緒に行動を共して頂けました。

の親でもある岩間布教部長が、三月の松本布教について、この時も、大阪以来、一緒に行動を共して頂けました。

大牟田、熊本の十九都市において展開され、熊本では青年行学講習会も開かれました。二月七日、身延川一百日間の水行も、無事成満しました。鶴峰誌も雑誌らしく充実してきました。発行部数も千部を越えるようになりました。そして三月五日、私たち

大牟田、熊本の十九都市において展開され、熊本では青年行学講習会も開かれました。

久留米、八女、筑後、大川、柳河、瀬高

街頭布教が、門司、小倉、八幡、戸畠、若松、折尾、直方、飯塚、博多、甘木、吉井

越えて本年正月四日より 長駆して九州

に泉を投する水行が始まりました

芳触を察つて、桂殿雲山橋下、身延の寒流  
二ツノ瀬へ、まく行方、治三日未だ一

芳艸の聲。六組朝靈山香子、舟底の寒流

百日間、龍華山豫定人の由比ヶ浜大荒行の

秋深き十月二十六日、この日を期して

の卒業式を迎えたのでした。

こうしてみれば、昭和三十八年三月の卒業生の中に、鷺峰会員がいたとしても、正式には本年三月の卒業生をもって、鷺峰会第一期卒業生ということが出来ましょ。

それだけに第一期卒業生の責任は大きいといふことが出来ます。何故ならば、鷺峰会の理想からみれば、本当の仕事は、むしろ、身延卒業後における会員の活躍にまつこと大なるものがあるからです。

### 鷺峰会の行動性

鷺峰会には、創立以来、会としての会則もなければ、綱領らしきものもありません。若し、欠くべからざるものといえば、それは正法宣布に対する道念と実践です。

実践行動のない鷺峰会といふものは、存

在する価値はありません。おのれを勘定に入れず、ひたすら正法の宣布、興隆を祈つてやまない、たゆまざる実践行動によっておのずなり異体同心の実もあがられ、おのずから会も維持され、飛躍的に發展していくのです。

会のための会でなく、正法宣布の行動が実は会名を持続しているにすぎない、といつても過言ではないでしょう。過去一ヶ年間の行動が、それを雄弁に物語っています。三月三日、それは卒業式の前のお筋句の夜でした。鷺峰会の送別会が開かれました。卒業生の一人一人に、会から一個の綱代笠が贈られました。

「この笠をかぶって繩教宣令せよ」というのです。私たちは固く誓いあいました。それは、卒業生は何処にいても、ひ

とたび鷲峰会の行脚布教の起る時は、全国各地から駆せ参する、ということでした。

また卒業生は、自分の故郷において、鷲

峰誌の読者を拡張すると共に、強固な在家青年会を結成することも書いあいました。

その青年会運営の基本が、街頭鑼鼓と、鷲峰誌の輪読、更にお題目千枚写経による施餓鬼供養という、実践にあることはいうまでもありません。

行動と実践、これなくして鷲峰会の生命はないのです。

### 身延から松本へ

三月六日、それは卒業式の翌日でした。

私は街頭布教の服装をして、一人、身延山から故郷の信州松本へと、太鼓をうって歩きました。

四日日の九日、松本市に入りました。町の人口には、両親が出迎えていました。父も母も泣いていました。

私の家は、市内の土井尻という町にある安立寺というお寺です。寺の前に来ると、大勢の檀信徒が太鼓をうって出迎えていました。

若し、私が学生服を着、汽車に乗って帰省したのでは、こういう感動は起らなかつたことでしょう。

### 千本の法鼓

私は信じます。全国日蓮宗の青年僧が、

理論理屈は先ず抜きにして、一勢に街頭に鑼鼓宣令する時、その時こそ既に宗門の改革は達成されているということを。

私は安立寺に起居する限り、毎日、市中

を太鼓をたたいて歩きます。檀家のお經題りに行く時でも、衝頭布教の姿で擊鼓して行きます。そして檀家の門前で、家人が食事して出迎えるまで太鼓をうちます。

家にあがっても仏壇の掃除をしてから、  
家の人々と一緒にお經をよみ、一緒にお題  
目を唱え、そして法話します。

私は檀信徒の者が、家族ぐるみ、一人残  
らず、それぞれ太鼓をもって、私と共に擊  
鼓宣令する日の、一日も早からんことを願  
い、そのように努力します。

私は安立寺に千本のウチワ太鼓のそろう  
日を楽しみにしています。千本の太鼓の威  
力が、如何に素晴らしいものであるかといふ  
ことは、やがて松本の全市民が認識するよ  
うになることでしょう。

それは、故郷の恩に報ゆる道であり、同

時に、松本の一角に湧き起る爲峰僧侶の在  
り方を、全宗門に問うものであります。

### 熊本から身延へ

本年四月八日、お釈迦さまの御降誕会を  
期して、三月卒業した爲峰会第一期生の四  
名が、熊本の清正公さまの本妙寺から、身  
延山まで擊鼓行脚を行います。そして身  
延に到着して、そのまま八月の三十五日間  
の信行道場へ入ることになっています。

その四名とは、福知山の沢田覺義君、熊  
本の小寺崇元君、広島の武村造司君と私で  
す。道中、幾多の困難が待っていることで  
しょう。雨にうたれることもありましょ  
う。野宿のつづくこともあります。途中、

疲労困憊し、病気にかかることがあります  
よ。

「ジェット機の飛ぶ時代、時代錯誤も甚しい。馬鹿げた奴だ」と嘲られもいたしましょう。

然し、歩く沿道のすべての人々の心田に仏種をうえつけ、有縁無縁の一切の靈に向して行く此の修行こそ、開教の基本であると信じます。若し、この修行を嘲う者がおれば、それは法華經の常不輕菩薩品を嘲うものです。

如何なる困難があつても、日本内地のこです。言葉も通じない海外布教の困難にハラハラ、何でもないことです。

### 同志三十名の行く処

卒業の日も近き或る日のこと、岩間布教師長が、私たちに向って、次のように激励されました。

「毎年の街頭布教で鍛練された身延の学生が、卒業後、全国に散っても、いざ、といふ時、全国各地から集結して、全国各所に街頭布教を展開する者が、およそ三十名を数えるようになった時、その力は絶大なものがある。その時こそ、日蓮宗は一新される。」

よいか、三十名だぞ。法華經宣布のために、命を投げ出す同志を三十名つくれ」身延を巣立つ鷲峰会学生の数が、三十名になることは、さほど遠い将来ではあります。五年の中には必ず三十名を越えるでしょう。

そして身延山を中心として全国各所に堂々の釋教大行進を推し進めて行くことでしょう。第一期卒業生は、その時の来るまで、先陣を開拓して行くのです。

身延山より西天インドへ

年來の因縁をもつ西天インドへ、まず第一に日本國の正法を伝えねばなりません。

「道はローマに通ず」

という諺がありますが、身延より発する布教伝道の道は、日本全国、津々浦々に、そして遠く海外、西天インドにも、全世界各國にも通じています。

駕峰僧伽の本来の使命の一つい、インドの中間にあるアシア仏教圏にも、お

のづから正法は伝わって行くことでしょう。

一國一字の埋蔵からすれば、日蓮門下の青年は、この理想をもって、世界各国に、少なくとも一人は駐留して釋迦宣令しなければなりません。

駕峰新年号の巻頭言にもあったように、日蓮門下青年僧の中でも、この天業に雄飛する者がなければ、駕峰会は、これに代って先駆して行かねばなりません。

在校駕峰の学生よ、奮起せよ。そして全

こうして考えてみれば、駕峰会青年僧の數は、最少限度、世界の国々の数ほどおら

ねはなりません。

然し世界広布の因縁をたずねれば、三千、月氏へ返るべき瑞相なり

「日は東より出で西へ入る、日本の仏法の

とは、日蓮大聖人が弘安三年十一月、諫

暁八幡神の結文として述べられた予言です。

この予言を空しくしてはなりません。日

蓮大聖人滅後、ほどもなく六老僧日持上人  
は、一天四海皆帰妙法の予言を信すればこ

そ、単身、北海を渡り、満蒙の奥深く、地

平線のかなたへと、果しなき伝道の旅をつ  
づけて行きました。

私たちも日持上人のあとにつくかねばな  
りません。異境、異邦の人々に正法を伝え  
るほどの決意と実践があるならば、日本国  
内地における開教伝道は易々たるものであ  
りましよう。

私も鷺峰会の一員として、日蓮門下の一  
人として、広くは日本佛教徒の一人として  
日本の正法を先ず西天インドへ返すべく、  
身を挺して靈鷲山頂に立って擊鼓宣令する

覚悟であります。

私は、私につく日蓮門下青年僧のいる  
ことを信じます。鷺峰会の動向が、仏意に  
かなうものであるならば、必ず二陣、三陣  
とつづいて来ることでありますよう。

### 世界僧侶

一國一字の理想からすれば、世界各国に  
少くとも一ヶ所の本化の僧侶が出来ねばな  
りません。その僧侶の中核となる者が身延

山を本とする青年僧であるならば、やがて  
身延を中心とした世界僧侶の涌出すること  
は決して夢ではないでしょう。

日蓮門下青年僧が、若し日蓮大聖人に忠  
実であるならば、全世界の各地に本化の僧  
侶の涌出のため、身を挺して行かねばなり  
ません。それが世界平和の道でもあるのです

## 最終回

# デ ク ノ ボ ウ の 祈 り

宮沢賢治の祈り、それは  
不輕菩薩の祈りであつた。



奈良学芸大学四年

## 榎 本 達 子

法華經の第二十。常不輕菩薩品の中には常不輕菩薩について、次のようなことが物語られています。

1

それは、数えることも出来ない遠い昔のことでした。大成（だいじょう）という国に、威音王如来という仏さまがいました。威音王如来は神智無量でした。そして無量無邊の法門を自由自在に説きあかしてはすべての人々を教化利益していました。

ところが、この仏さまが亡くなられた後正法千年の時代もすぎ、次の像法千年の時代もすぎ去ろうとする末法のはじめ、仏法は、まさに断絶しようとした。

かって苦しむ民衆の中にあって民衆の教済利益のため精彩を放っていた仏教は、

何時しか民衆より遊離していました。

脈々たる仏教の生命は枯渇して、たゞ單なる形式と化していました。広大なる寺院形態の中には、民衆をみくだした保守的な僧侶たちが、仏教を独占して、みずから慈悲と憐憇をほしいまゝにしていました。

そして民衆の苦しみを外に、もっぱら難解な經典の説誦を競いあい、高踏な理論理屈をふりまわしては、観念の遊蕪にふけっていました。

もはや仏教の教えは残っていても、これを実践する行はなく、行がなければ正覚もなく、仏教本来の姿は、全く地を払っていました。

この時、一人の菩薩僧があらわれました。これが常不輕菩薩でした。通常、不輕菩薩といわれている人です。

彼は、今までの僧侶のように寺院殿堂の中に超然としておるのでなく、常に街頭に立ちました。また彼等のように難解な經典の説誦を専一にするところなく、たゞひたて独占され、こうした教團と一般民衆の間

には、大きな断層が出来、俗界を超越したかに振舞う教団の中には、独善と偽躋<sup>シテ</sup>慢と因襲がうずまき、突き放された一般民衆は、仏教には手もとがない所にあってなお人生苦、社会苦の重圧にあえいでいました。それは今も昔も変らぬ末法禪季の姿でした。

## 2

民衆のためのものであったはずの仏教は僧侶と僧侶をとりまく一部の信徒によって独占され、こうした教團と一般民衆の間すらに道ゆくすべての人々を、平等に礼拝

三  
ま  
し  
だ

当時の社会は、僧侶の階級と、王族武士の階級と、農工商の一般庶民階級と、それにセンタラという奴隸階級の、四つの敵し

い階級に分けられていました。  
そして更に、この四姓階級にも入れない  
不可触賤民という人種もいました。仏教經  
典の中に「人非人」といわれているのが則  
ちそれです。人非人とは、読んで字の如く  
人間あつかにされない人々であり、人間の  
形をした動物とみなされていた人々であつ  
たのです。

かわしても汚れるといやしまれ、信仰の自由ですらも与えられていませんでした。そして生き生き。人非人であらねばならなかつたものでした。

ちなみに、こういう社会状態は一九四七年（昭和二十二年）インドがイギリスより独立するまでつゝきました。そして独立と同時に、数千万の不可触賤民は、信仰の自由をかちるとと共に、それまで数千年来、彼等を圧迫して来たヒンズー教にもマホメット教にも加わらず、また大乗仏教にも小乗仏教にも属せず、今や、みずから独自の新佛教運動を開拓しようとしているのです。

その起りは、インドアーリヤン民族が中央アジアよりヒラヤマ山脈をこえてインド大陸に侵入した時、征服された先住民族であったともいわれているのです。

不可触賤民には、体にあれても、言葉を

この一事をもってしても、不可触職民が如く、何にみじめであつたかが想像されましよう。ところが不堅菩薩は、既にそうした人々に対してさえも、貧富、貴賤、老弱、男女

の如何をとわず、階級、差別をも超越してすべての人々を礼拝していたのです。

それは、たゞ一人の、たゞそれだけの行為にすぎないものであったとしても、当時としては宗教的にも社会的にも、まさしく破天荒な出来ごとでした。

何故ならば、教団僧侶の悉くの者は、民衆が如何に苦しんでいようとも、また社会が如何に混乱していようとも、寺院殿堂の内に超然としていて、みずから進んで街頭に出、民衆の中へ入って行くというようなことはなかったからです。いな出家といふものは、本来、如何なる時代であっても、出家らしく社会から超然としておるべきものである、とされていたからでした。

そして俗人では到底、及びも難い浩蕩な經典を、より早く、より多く、しかもより

神秘的に誦誦することを専一にすることによって、僧侶たる者の権威を保ち、その権威を誇りとするが常とされていた当時としては、經典の誦説を二義的なものとみすことは、それこそ人天ともに許し難き破戒行為とされていました。

ましてや仏法僧の三宝を礼拝こそすれば、人間を礼拝するなどとは思いもよらぬことであり、尊敬にもあたいしない者、たとえば貧しき者、賤しき者、無智文盲の者、女や子供たち、そうした一般民衆、いわんや不可触賤民などに對しては、むしろ軽蔑したり、無視したりすることが当然のこととなっていたからでした。

て不輕菩薩は、たとえ一人であっても、敢然として寺院の権威をすてゝ衝頭に出、經典説誦の権威もすて、社会の階級さえ打破して、あたかも仏陀を礼拝するが如くに、すべての民衆を礼拝したのでした。

それは革命にも等しき行為でした。教団に対する反逆、社会に対する反抗とも受け取られるものでもあったことでした。人々は、よってたかって不輕菩薩をにくみ、のゝしりました。その中、最もひどく憎んだのは教団の僧侶と、僧侶をとりまく信徒の人々でした。

そして彼等が、最も激怒したことは、不輕菩薩が道ゆく人々を礼拝するたびごとに人々を説教した言葉でした。それは法華經典の中に、次のように述べられているのです。

我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何  
汝等皆行菩薩道 当得作仏

(以上二十四字)

「我れ深く汝等を敬う。敢て輕慢せず。所以はいかん。汝等みな菩薩の道を行じて、まさに作仏することを得べし」

この漢文二十四字の言葉について、日蓮聖人は「顯仏未來記」の中で、「彼の二十四字と、この五字と、その語異るといえども、その意、これ同じ」と申されています。則ち日蓮聖人の御指南によれば、不輕菩薩のこの言葉は、そのまま妙法蓮華經の五字のお題目の心であるのです。

私は、あなたがたを、どなたでも、すべ

て平等に、そして深く教います。決して輕ろんするようなことはいたしません。」  
「何となれば、あなたがたは、すべてみ仏の子であり、子が親となるように、どなたでも成仏する素質、仮性をもっているからです。」

「たとえ今、法華經を信じてはいなくとも、また或は法華經にそむき、法華經をそしる

ようなことがあつたとしても、今生でなければ次の生、次の生でなければ、また次の生、生れ替り、死に替り、未來永劫の時間経ても、きっと、み仏の子としての自覚をもつようになり、必ず法華經を信じて菩薩道を行じ、遂には自己本具の仮性を開顯して、仏陀としての人格を完成することが

出来るからです。」  
「そしてまた、過去のみ仏がそうであった

ように、あなたも仏陀として、無量無邊の人々を教化利益するようになるからです。」  
「私は、その時の、尊くも輝しきあなたの姿、あなたの功德を思えば思うほど、たとえ今、法華經を信じていなくても、また法華經をそしつていたとしても、それでもなお深く、深くあなたを敬わずにほおられないのであります。」

かくの如く不輕菩薩は、すべての人々の一人一人の上に、三世を通して仏身を観せられたのでした。またそのように仏身が観せられれば観せられるほど、すべての人々に対して、合掌礼拝せずにほおられなかつたのです。

文永十年四月、春まだ遠き寒山佐渡が島雪の塚原三昧堂の中、一期自身の大事をしたためられた観心本尊龕の中に日蓮聖人

が、  
「不輕菩薩は、所見の人において仏身を見  
て凡夫そのものにも、仏身を観ずることが  
出来たのです。」

る」

と御せられた所以のものも、実は、ここ  
にあったのでした。

不輕菩薩が、たゞひだすらに礼拝を行じ  
た但行礼拝の当所、それは街頭であっても  
樹下石上であっても、或は人々がたむろす  
る井戸端であっても、如何なる所において  
も、その所そのまゝが、三世十方にあまね  
き仏界であり、大マンダラの法界であり、  
いわゆる仏界所具の事の一念三千の世界で  
あったのです。

そして不輕菩薩みずから、その仏界に住  
しておればこそ、すべての人々をはじめと  
して、森羅万象の悉くのものまで、久遠  
に輝く仏界の中のものと仰ぎ、三世を通し

然し、こうした不輕菩薩の精神が、當時  
の人々に理解されようはずはありませんで  
した。特に形式至上主義に堕ち入っていた  
教団の人々は、即身に仏陀となることの至  
難さから、仏陀より一段さがった阿羅漢と  
なることを目標にして、戒律をたもち、經  
典を誦誦し、理論をたくましくするなどし  
て、もっぱら威儀をととのえていただけに  
不輕菩薩のこの言葉を聞けば、こうした自  
分たちの修行が、一言のもとに一蹴された  
かのように感して、激怒してしまいました。  
この激怒の中には、不輕菩薩が日頃、經  
典も誦誦せず、理論もよりまわさず、一向

に賢いそぶりもせずに、ひたすら一般大衆の中でも愚民、賤民ですら礼拝していたところから、

「不輕菩薩ほど無知な者はない」  
と軽蔑していたのにもかかわらず、そういう者から、劫って、自分たちが無愧されたという反感もあり、また或は、そういう無知な者から、ことあるうに彼等ほどのものが、一般大衆、ことに愚民、賤民とまで同列にみなされたという理由もあったことは、いなめないことでした。

法華經經典の中には、罵詈、怒辱する彼等の言葉を、次のように伝えて います。

「この無智の比丘、いずれの所より来つてみずから、  
「我れ、汝を輕ろしめず」  
と言つて、我等がために、

「まさに作仏することを得べし」と授記する。我等、かくの如き虚妄の授記を用ひず」

と。これによれば不輕菩薩は、何處からやつて来たかも判らない、果しない布教の旅をつづけていた者であったことが想像されましよう。然し一般の人々には、一介の浮浪者としか見えませんでした。

事実、不輕菩薩は教団に属する者でもなく、一ヶ寺の住職でもありませんでした。一人の信者がおるわけでもなし、町に縁故の者さえおりませんでした。

人々は不輕菩薩を迫害するのに、何はふかることはありませんでした。不輕菩薩はよつてたかって、ののしられました。石や瓦も投げつけられました。或は杖で鞭うた

れることもありました。

毒蛇の多いインドの国では、多くの人々は毒蛇をはらう杖を常に手に持っています。不輕菩薩は、その杖で、まるで蛇でも打ち殺すかのように、打ちさえられたのです。

打撃された全身の皮膚は、いたるところ黒ずみ、或は裂け、生傷のたまる暇はありませんでした。袈裟、衣もボロボロになってしましました。然し不輕菩薩は、決して抵抗しませんでした。そしてなおも、

「我れ汝等を敬う……」  
という「十四字の讃歎の言葉をもって、礼拝しつづけました。それは生きとし生けるすべての人々を敬い、敵をも敬う言葉です。

あり、けに一切の差別、対立をも超越した人間革命の言葉、いな人類の歴史上、不滅に輝く言葉であったのです。

のみならず不輕菩薩は、おのれをののしり、打ち、蹴ける人々のために祈りました。「どうか、これらの人々が、一目も早く、み仏の子としてめざめ、菩薩道を行じて、仏身を成就しますよろ……」

不輕菩薩の心眼には、悪鬼の如く迫害し来る人々の上にも、未来、必ず成就するであろう騒ぎみ仏の姿が、それぞれ渾然としていたのです。

また不輕菩薩は思いました。

「今、法華經を行ふことによつて、このような無量の迫害をうけるのは、おそらく自分が、過去世において、このように法華經の行者を迫害した報いであろう。」

「されば現在この迫害を忍耐すること」といふと、そのまま過去説法の重罪を消滅する」とあり、迫害者こそ、得がたき恩人として感謝しなければならない

と讃歎した言葉をもじり、軽蔑嘲笑を意味して名付けた仇名だったのです。

## 5

不輕菩薩の祈り、それは同時に自己懲悔の祈りでしたそしてこの愚痴が深ければ深いほど、街頭、遠くにいる人々の姿をみてでさえも、ことさらに近づいて行つては礼拝、讃歎をくりかえしたのでした。こういうことが、幾年も幾年もつづきました。何時しか人々は、無抵抗の不輕菩薩に對して、

不輕菩薩は、すべての人々に対しても、たゞひたすらに礼拝し、讃歎することをつらぬき通しました。然しその生涯、誰一人として、そうした不輕菩薩をたよえる者はなく、却って罵詈打擲をほいままにされるばかりでした。まことに痛しい限りの忍辱忍難の生涯というほかはありません。然し、ここに注意すべきことは、不輕菩薩が、社会の幣寄、既成宗教の墮落に対し、一言も攻撃したり抵抗したりするようなことがなかつたということです。更には、「不敢輕慢、決して軽ろんするようなことはいたしません」

「不輕、常不輕」と呼ぶようになりました。それは不輕菩薩が、すべての人々に対しても、

不輕菩薩は、既成宗教の墮落に対しても、一言も攻撃したり抵抗したりするようなことがなかつたということです。更には次々に迫害し来るすべての人々に対しても、礼拝、讃歎の祈りのみを捧げ通した

ということです。

勿論これには、不輕菩薩自身の心底に、深い自己懲悔があったことは申しませんが、不輕菩薩は、こうした忍難懲悔によって、はじめて無始以来の、無量深重なる罪業を消滅することが出来たのでした。

法華經々典の中では、この間の消息を、「其罪畢已・・その罪おえおわって」と記しております。

不輕菩薩の全生涯にわたる無量の受難も、日蓮聖人は文永十年八月三日、佐渡ヶ島より波木井三郎へあてられたお手紙の中で、また、そのまま不輕菩薩自身の無始の罪障を消滅せしめるものでした。そしてそれば「末代の悪人等の成仏、不成仏は、罪の軽かりでなく、不輕菩薩の身の上に、遂に天重にはよらず。たゞこの経の信、不信にまかすべし」

「法華經のところは、当位即妙、不改本意と申して、罪業を捨てずして仏道を成する

なり」

と仰せられていますが、まことに法華經の信仰は、人間罪障の軽重如何をとわず、

そのままで仏界に入り、仏界の中で、すべての人々に仏身を観じつゝ、菩薩道を行じてゆく時、そこに計らずも競い起つて来る幾多の受難によって、はじめて無始以来の無量の罪障も、おのずから消滅されて行くのです。

不輕菩薩の全生涯にわたる無量の受難も

法華經を説法される声が聞えて來たのです。

そして、これを悉く信受した不輕菩薩はたちまちにして六根清淨の身を成就することを得、更に一死まぬがれて寿命を増益することが出来たのでした。

このことを法華經々典の中では、かの有名な經文として次のように述べています。

不輕菩薩 能忍受之

其罪畢已 臨命終時

得聞此經 六根清淨

神通力故 増益寿命

「不輕菩薩、よくこれ（追善）を忍受しき

その罪おえおわって、命終の時に臨んで、

此の經を聞くことを得て、六根清淨なり。

神通力の故に、寿命を増益す」

この事をもってしても、人間の臨終の一念の在り方が如何に大切であるか、とい

うことが痛感せしめられます。不輕菩薩は爾来、広く人々のために大神通力、楽説弁力、大善寂力をもって法華經を宣説し、遂に、これまで迫害し来ったすべての人々をも信服隨願せしめて行つたのです。

そして、この物語の最後には、

「その時の常不輕菩薩は、豈に異人ならんや。則ち我が身これなり」

と經文にも示されてある通り、不輕菩薩こそ後に生れ替つて釈迦牟尼世尊となられたのである、と結ばれているのです。

## 6

以上、長々と法華經々典の中に示されてゐる不輕菩薩の物語を述べて来ましたが、この物語を通して私たちは、不輕菩薩の精神と、その実践を学ばねばならないと思ひ

ます。

日蓮聖人でさえ、その上行の菩薩道を、そのまま不輕の菩薩道とされておられたのです。

今、その代表的御遺文をかかぐれば、聖人知三世事に云く、

「日蓮は、これ法華經の行者なり。不輕の跡を紹繼す」

「日蓮は、かの不輕菩薩に似たり」

佐渡御書に云く、

「日蓮は、過去の不輕の如く。當世の人々は、かの輕重の四衆の如し。人は替れども因はこれ一なり」

寺泊御書に云く、

「法華經は三世說法の儀式なり。過去の不輕品は今の勸特品。今の勸特品は過去の不

軽品なり。今の勸特品は未來の不輕品たるべし。その時、日蓮は即ち不輕菩薩たるべし」

如何に日蓮聖人が、不輕菩薩の芳触を無わていたかとすることが、この御遺文によつても明瞭であります。

日蓮聖人は不輕菩薩の菩薩道を行することによって、遂に上行菩薩の再誕という自覚を表明されるに至ったのでした。

日蓮聖人の道、それは不輕菩薩の道、日蓮聖人の祈り、それも不輕菩薩の祈り。そして日蓮聖人の受難と懺悔も、そのまゝ不輕菩薩の受難と懺悔であり、日蓮聖人の滅罪もまた、そのまゝ不輕菩薩の滅罪に通ずるものであったのです。

法華經文学の創設のため生涯を捧げた宮沢賢治が、最後の手帖「雨ニモマケズ」の詩篇にうたいあげた「デクノボウの祈り」も、不輕菩薩の祈りにほかなりないものでした。

不輕菩薩が人々から、

「不輕、常不輕」

と悪口、嘲笑されることに生涯甘んじて

いたよう賢治もみずから、

「デクノボウ」

と呼ばれることに甘じ、如何に嘲笑され

ようともたゞひたすらに法華經の信仰を

伝えることに専念したのでした。

生前の詩集の中に、みずからを郵便配達夫に任じ、配達夫が吹雪をついて、あえぎ

あえぎ暗い詩をこえて、郵物物をとづけ

に行くように、感謝もされない当然の勤めとして、一人一人に法華經を伝えようを企願していたのです。

ほどんど誰でもそうであるように、郵便物がとづけられても、ことさら郵便配達夫の労苦を思う者はありません。

賢治は法華經を人々に伝えるに当って、自分が感謝されようなどとは毛頭勘定に入れず、全く郵便配達夫と同じ立場に身をおき、そこに甘じようとしたのです。

賢治は、自分が感謝されるよりも、人々が法華經の心にふれることのみを願ったのでした。そしてそのためには、生涯どのよ

うな苦難にも堪えぬこうとしたのです。

童話「鳥の北斗七星」の中で、

そのためならば  
わたくしのからだなどは

何べん引き裂かれても  
かまいません

どうたつてているのも、賢治のこうした心  
をあらわすものであります。

身をテクノボウにたとえ、郵便配達夫に  
たとえた賢治の祈り、それは謙虚な、あま  
りにも謙虚な祈りでした。その祈りは、昭

和八年九月二十一日、賢治が臨終に際して  
有様の人々に贈ろうとした国訳法華經一千  
部の、それぞれの巻末に、

日蓮門下の中では、法華經の行者ぶつては  
感猛烈しくなる人の多い傾向を見る時、賢  
治のこうした謙虚な態度こそ頂門の一針と  
して学ぶべきものがあるのでないでしょ  
うか。

## 8

私の全生涯の仕事は  
この経をあなたのお手許に届け  
そしてその中にある仏意にふれて  
あなたが無上道に入られんことを  
お願ひするほかありません

と記入するよう遺言したことと、きわま  
るものでした。

然し賢治を研究する人々の中には、賢治  
のこうした謙虚さをもって、  
「賢治には廟氣がない。むしろ自己を痛め  
すぎると」

と評する者もいるようです。然し賢治の  
テクノボウの祈りの中には、世界宣布に対  
する燃え沸るような情熱が秘められていた  
のでした。

たとえば農民芸術概論の中では、個人  
「世界全体が幸福にならぬいうちは、個人

の幸福はあり得ない」

と絶叫しており、友人が中国へ渡ると聞けば、それに尋よせて、

頗くは一天四海もろともに

この妙法に帰しまつらなん

とうたっており、又の手紙の中にも、

「先ずは、自ら勉励して法華経の心を悟り奉り、働き自らの衣食をもつくのはしめ、進みては支那、印度にもこの經を広め奉るならば、唯々唯々父上、母上をはじめ天子様、皆々様の御恩をも報じ、折角御迷惑をかけたる幾分の償いを致すこと存じ候」

としたふめては、心は中國、印度までも法華経を宣布するよう、はやっていたのでした。

伝えるところによれば、賢治は、七字の

お題目の数にちなんで、故郷の七つの山に法華経一十八品の写経を埋めて、日本國土が速かに正法に帰依することによって淨仏國土となることを願っていた、ともいわれております。

こゝにも賢治が、身は病床にありながらも、法華経の世界宣布と、祖國の仏國となることに対して、如何に大いなる意欲と悲願をもっていたかどうかがわれましよう。

個人的には、あくまでもデクノボウに甘じていた賢治ではありながらも、四次えの理想世界を、地上に実現すべく、農芸藝術論の中では、次のように絶叫しています。

世界に対する大いなる希望を先づ起せ強く正しく生活せよ苦難を磨き直進せよ先づもろともに輝く宇宙の微塵となれて無方の空にちらばらう。

まことの愛情は

相手の立場になつて  
相手を理解することから始まる

(四月号教義)

「観音の三十三身」という教えがありますが、観世音菩薩は三十三身に身を変じてまでも、相手の立場になつて人を救濟しようとされました。

また法華経の中には「長者窮子」の譬え話しがあります。長者は窮子を救うためには、みずから窮子と同じ姿に身をえてまでも、指導に当られました。

まことの愛情は、まず相手の立場になつて、相手を理解することから

始まるのです。たとえ小さな親切でもこの道理に変りはありません。

自分の立場で、相手を理解することなく注ぐ愛情や親切は、たとえ真剣であつても所詮それはエゴ的愛情であつて、却つて害を与えることがあります。

愛情や親切が眞実であるならば、それはまず己のれを空しくして相手の立場になり、相手を理解したものがなければなりません。

仏陀の慈悲を仰がなくては、こういう愛情をもつことは出来ないであります。

(身延山大学三年 小林白峰)

## まことの愛情

### 教義 説明

## 孝道に生きぬく者

## ◇第一回◇

私の出家の動機

それは、ごく平凡なことであるかも知れない然し……

身延山大学三年

和田吉弘



「孝養に三種あり。衣食をほどこすを下品」とし、父母の意にたがわざるを中品とし、功德を回向するを上品とす。存生の父母にだに、なお功德を回向するを上品とす。いわんや亡き親においておや」  
これは日蓮大聖人があらわされた十王讃歎沙の中の一節ですが、この一節こそ、私をして出家の道へふみきるに至らしめたお言葉でした。

2

それは昭和三十七年、高校卒業を目前にひかえた三年生の年の二月十六日、あたかも宗祖御降誕の、御聖日の夜のことでした。父母の前に呼びすえられた私は、父から

1

日蓮大聖人の、この御遺文の一節を聞かされたのです。

父は申しました。

「世の中に『孝は百行の本』などいう、ことわざがある。これは、古来あまりにも言いならわされて来たゆめ、俗的にも陳腐にも聞こえもしやう。然し、万世不滅の真理であることは變りはない。

孝養は、人間の、すべての行いの根幹であり中核である。どういう素晴らしいことをしても、孝養の道をふまない者は、遂には人間の道に欠け、みずから不幸におち入ってしまう」

父の言葉は、つぶきました。それはおよそ次のようにでした。

なるほどお釈迦さまは、道を求めるためには、親もすて、妻子もすて出家された。然し十二月八日の仏晩、尼連禪河のほとり菩提樹の下で、悟りを開かれた時、この悟りの道を、まず第一に伝えようとしたのは、かつて恩にあずかった人々に対してであつた。

お釈迦さまは、菩提樹下にあって、神通力をもって、苦行時代のお師匠さまであったアラーラ・カラーマ仙人と、ウツダガ・ラーマブッタ仙人のおられる所を探された。然しあラーラ仙人は既に一週間前に亡くなつておられた。ウツダガ仙人は昨日亡くなられたばかりであった。お釈迦さまは、心から、この二人のお師匠さまに御回向され

今度は修行時代のお友達の恩に報ゆべく、五人の修行者の居所をさがされた。五人の

修行者は鹿のすむ原野、鹿野園において修行していた。お釈迦さまは菩提樹下の座より立ち上るや、鹿野園へ向って歩かれた。

鹿野園へは、およそ三〇〇キロ（七十五里）もあった。然し、お釈迦さまは友人の恩に報ゆるため、悟りの道を説かんとして

三〇〇キロもある道を、一人で歩いて行かれたのである。お釈迦さまが友人の恩でさえ、如何に深く感ぜられておられたかと推察されよう。

次にお釈迦さまは、修行時代の外護者であったマガタ国(ビンゼ)サーラ大王の恩に報ゆるため、今は仏弟子となつた鹿野園の五比丘と共に、マガタの首都王舍城へ入り大王をはじめ多くの都民のために正法を伝

えられた。この時、千数百人の仏弟子が出来た。

その中には、後に釈迦十大弟子の一人として、智慧第一とうたわれるに至った舍利弗尊者や、神通第一とうたわれるに至った目連尊者もいた。また大王の寄進によって竹林精舎が建てられたのも、この時のことである。

こうしてお釈迦さまは、修行時代の人々の恩に報いて後、直ちに故郷カピラ城へ向い、父なる淨飯王をはじめ妻子血縁の一族のため、祖国の国民のため、正法を伝えることによって、報恩の誠をつくされたのである。

その後、お釈迦さまは一月十五日の夜半キレン河のほとり、沙羅双樹のもとで御入滅されるまで、八十年の御生涯を、有縁無

縁の一切衆生の恩に報ゆるため、正像末の三世を通して、人類永遠の道を説き示して行かれた。

仏陀お釈迦さまにおかれても、恩を知り恩に報ゆること、かくの如くである。久遠の本仏釈尊の勅使・本化上行菩薩の再誕と仰がれた日蓮大聖人、六十一年の御生涯もまた報恩に徹したものであられたことは、今さら喋々述べるまでもない。

建長五年四月二十八日、清澄山頂に立たれた大聖人は、太平洋上にさしのぼる旭日

に向って、立教開宗を宣言された。その後、修行時代の恩に報ゆべく、お師匠さま道善御房をはじめ、義淨、淨頭等々の法兄や、地頭の東条景信等々の檀信徒に対しても、未頃真実の大法を宣説された。

然し、却って逆鱗にふれ、清澄山を追わ

れた大聖人が、次に報恩の誠を尽されたのは、御両親に對して正法帰依を讒かれたことだった。御両親は即座に法華經に入信された。そして父君には妙日、母君には妙蓮といふ法号をたてまつられた。大聖人一代

六十一年の御生涯の中で、一番最初に法華經に帰依された人が、後の六老僧でもなく直櫻でもなく、大聖人自身の御両親であったということは注意しなければならないことである。ここにも大聖人の孝道が偲ばれよう。

これより死身弘法の立正安國運動が、鎌倉街頭に展開される。四か度の大難、無量の迫害は頻発した。然し大聖人は、一切衆生の恩に報いんとする布教であったればこそ、執拗に迫害し来る法敵の者にさえ、な

そして開教場の中に、

「若しは信、若しは譲、共に仏道を成す」

といわれる通り、法敵と共に成仏しようとまでされたのである。

また一方、伊豆に流され、佐渡へ流された流配中、食うに食物もないさなか、船守彌三郎夫妻や阿仮房夫妻に助けられては、「我が父母が生れかわりて、日蓮をはぐくみたもうか」

と感謝されている。こゝに変化の人に感謝すること、なお父母を思うが如くであら

れた大聖人が、如何に御両親をしたっておられたかという一面の消息が偲ばれよう。

身延御入山後、程もなく、清澄山のお師匠さま道善御房が亡くなれるや、建治一年七月二十一日づけの御書として報恩抄上下一巻をあらわし、これを弟子の日向山上人

に持たせて清澄山へ送り、道善御房のお墓の前で読ましめられた。その結びのお言葉に、法華經広宣流布のあかつには、

「花は根に返り、真味は土に留まる。この功德は故道善房の聖靈の御身に集るべし」と述べられているほどである。

身延御在山九カ年間、大聖人が木の根ずたいに五十丁、身延の山頂高く、遙かに故郷房州の空をふしおがんで至孝の情を述べられたことは、あまりにも有名なことであるが、今にし残る山頂四本のお手植の杉、父杉、母杉、お師匠さま道善御房の追善を祈られた杉の木、そして一切衆生の恩に報ゆべく立正安國を祈願された杉の木、この四本の、天にも摩する杉の木こそ、七百年の星霜を経てなお、報恩至幸の道を万世に垂れている龜鑑である。

仏教では四つの恩が説かれている。仏法  
僧の三宝の恩 師の恩 親の恩 国主・一  
切衆生・国土の恩。

恩を感じない者は、犬・畜生である。恩  
に報いない者は、人間の皮をかぶった人非  
人である。

#### 4

父は、なおも諄々として説き聞かせまし  
た。  
「お父さんもお母さんも、お前が仏門に入  
ることを希望する。然し大聖人が十王讃歎  
鈔の中に申されているように、衣食を施す  
を下品とし、父母の意にたがわざるを中品  
とする。

私は、お前が僧侶となつて、お布施をか  
せぐことを望むのではない。またそのお布  
施で家族の生活を助けることを毛頭だに望  
むものでもない。そういう僧侶ならば、む  
しろなつてもらいたくない。

私が望むところのものは、人類の親であ  
る久遠の本仏釈尊、その勅使である本化上  
行菩薩の再誕、高祖日蓮大聖人に對して  
提婆達多品の中でも説かれている通り、檀  
王が阿私仙人に、所須を供給し、この実を  
とり、水をくみ、薪をひろい、食をもうけ  
乃至、身をもって牀座となしたように、千  
載給仕の誠をつくし、更に仏祖の願業に生  
きて、一切衆生の恩に報ゆべく立正安國の  
運動に、身を挺してもらいたいからである。  
然し、この道は、想像することも出来な  
いほど、あまりにも厳しい。親として子の  
お前に對して、このようなことをいうのは、  
或は酷であるかも知れない。

然し三宝給仕に従事する時、馴り知れない功徳をうける。そして遂には、身みずから本仏のような崇高な人格を形成することが出来る。私はお前が、仏陀の如き最高の人間となることを理想とし、その理想に向って、たゆまざる努力をつむけることを希望する。

僧道の地に落ちたこと、今日より甚しき時代はない。この僧道は復活させねばならない。親子一代、二代、三代、代を経ても親から子に、子から孫に、僧道復興に全力を注ぐことこそ、妻帯を許された僧侶の、せめてもの勤め、いやギリギリの責務である。

生涯独身で僧道を守ることは、たやすいことであるかも知れない。然し時代の趨勢は、殆ど僧侶という僧侶は、みな妻帯して

いる。私もそうである。そしてお前も僧侶の子として生れ、僧侶の子として育つて来た。この中には、僧道を守り、僧道を復興することは、容易ならざることであるかも知れない。

然し、この至難を克服する者こそ、独身の僧侶というよりも、妻帯の僧侶、そして僧侶の子でなければならない。

若しお前が、私の志をついで僧侶として僧道復興に努力し、四恩に報ずる立正安國運動に身を挺するならば、親の私として、これほどの喜びはない。三宝さまも喜ばれることであろう。御先祖さまも喜ばれよう。最高の孝養というものである。

このように語る父の言葉は、あふれる涙

に、しばしばとだえました。また母も、しきりに涙をふいていました。そして最後に、

父に代って、

「吉弘 賴みますよ」

と言うや、母は嗚咽にむせびました。正座したまゝ頭をたれて、黙念として聞き入っている私の膝には、訳もわからぬ大粒の涙が、ボタボタ落ちて、ズボンを深くぬらしました。

法華経の経文の中には、宝塔まさに現わ

れんとして、

「大地六種に震動す」

とあります。その時の私の心は、あたかも六種震動そのもののようにあった、といつても過言ではないでしよう。それは生れてはじめて体験する境地でした。

心の中の大きいなる震動は、それまで立ち

こめていた深い心の暗霧を晴らして行くようでした。

そして晴れ行く霧のかなたに、私のるべき高山の頂きを、今こそ、はっきりと見出した思いがしました。それは畢竟ながらも崇高な山でした。富士山のような優雅な山でなく、千古の雪をいたゞき、牙のようになにそぎり立ったヒマラヤのような山でした。

「人間、登るべき山が多い。然し、私の登る山は、この山一つだ」

と思つたのです。生涯を賭しても、その山頂をきわめることは不可能であるかも知れません。然し、今生で出来なければ次の生、次の生で出来なければ、また次の生、生まれ替り、死に替つても、この山頂をきわめねばなりません。

私の胸は、しめつけられるように高鳴り、熱い血潮は、うずをまいで全身をかけめぐりました。

私の盲目は開かれたのです。それまでの私は、高校バスケット・ボールのキヤップテンであったところから、スポーツにあこがれ、スポーツに生甲斐を感じ、スポーツマンとしての人間理想をえがいては、一方父の如く僧道に生きるべきかどうか、眼前に開けている二つの道、この人生岐路に立って、いずれへ進むべきか、なやみ果て、いたからでした。

(以下次号)

身延山開闢七百年記念事業

身延山短大 新校舎・大講堂の建設

日蓮聖人滅後数百年の輝しき伝統をもつ身延山の学舎は、昭和四十八年の身延山開闢七百年記念事業として、新校舎と大講堂を建設し、人材養成の万全を期することとなりました。

○規模 鉄骨鉄筋コンクリート造、地上五階、総坪数一一〇一坪三六

○予算 二億五千万円

c 寄附申込方法

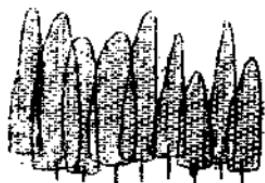
1、一口一千五百円

2、即納、分納、三ヶ年以内

○寄附金取扱所

身延山久遠寺 振替：甲府五〇六番

# 靈鷲山の仏舍利塔



象

## 耆婆の薬草園

お駕廻さまが法華經を説法されたという靈鷲山の第一峰から、ビンビサーラ大王の布石階段参道（；それもインドにおける仏教滅後千数百年来、風雪にさらされて今は見る影もなく荒廃し切っているものですが・・・）その参道にそって麓へ降り切った所にロータリーがあります。

このロータリーより旧王舍城へ向う途中、道の両側に耆婆の薬草園の跡があります。妙婆といえど、日蓮聖人の御遺文では、四倍五品錘の中で、「問う、その義を知らざる人」たゞ兩無妙法蓮華經と唱えて、解義の功德を具するやいなや。答う。小児の乳をふくむに、その味を知らざれども、自然に身を益す。耆婆が妙藥、誰か持えて之れを服せん」と言われてゐる、その耆婆のことです。

白 高 日

香婆は、お釈迦さま御在世当時、インド

拝しました。

切っての名医とうたわれた人でした。そして医者であるのにもかゝわらず、最も深くお釈迦さまに帰依していた一人でした。

香婆は、王舎城から靈鷲山へ行く道の途中、その両側に適切な薬草園を求め、その中に無数の薬草を栽培しました。そして此處に病気になった仏弟子や一般市民を収容しては、治療に当っていました。

お釈迦さまは、王舎城に御布教される間は、必ずといってよいほど毎日のように、起居される竹林精舎と、御説法される靈鷲山の間を往復されました。

香婆が、多くの仏弟子や御信徒をつれて香婆の薬草園の中間の道を通りかかるや、収容されていた多くの病人たちは、沿道の両側にならんでお釈迦さまを礼

お釈迦さまは、病人の一人一人に会釈されました。或は暫し立ちどまって説法されることもありました。また或は、みずから

薬草園の中へ入られては、起き上ることも出来ない病人たちを、ねんごろに見舞われることも再三のことではありますでした。

香婆が、患者を収容する薬草園を、王舎城外の、靈鷲山へ行く道のそばに、しかもその両側にもうけたのも、こういう理由によるものであったのです。ここに香婆が、名医としても信徒としても凡庸でなかつたことが推察されましょう。然し、その薬草園も今は荒廃したままになつてゐています。

### 王舎城の魔境

婆の薬草園から、更に王舎城の方へ進

めば、やがて靈鷲山と高起山の谷間の湖より流れて来る河があり、橋を渡れば王舎城の内側城壁跡。

これより王舎城の城街となるのですが、

かってインド第一の都として繁栄した面影はなく、今は廃墟と化して、一軒の人家さえもありません。見渡す限り荒涼たる遺蹟は、密林におおわれたままになっています。

もとより王舎城と、これをめぐる五大山は、インド古代の史蹟として國有地となり、國家の管理するところとなっているのですから、個人が勝手に手を入れることは出来ません。

王舎城の広さは、日本でいえば、丁度京都の町ぐらい。たとえば京都の町が廃墟になつたと仮定して、その周囲に、比叡山のような山が五つかこんでいると想像すれば、現在の王舎城を偲ぶことが出来まじょう。

年に一度、政府によつて密林に火が入れられ、雜木が焼き払われます。然しサボテンは火に焼けませんので、年々サンテンだけが密種し、王舎城はサボテンの密林と

なっています。

人影も稀な王舎城の廃墟には、遺蹟の岩疊や、サボテンの林の中から、時折、虎が飛び出すことがあります。

虎が搏息しているほど荒廃した王舎城の原野の中央に、北門を起点として南門と西門へ二本の舗装された高速道路が走っています。これは仏誕一千五百年祭を記念して、インド政府によつて造られたものです。定期的にバスも走っています。

提婆の栗草園から高速道路に出、これを

閉しました。

北門へ向うと、程なく右手の多宝山側へ入る道があります。その道の突き当たりに、ビンビサーラ大王の幽閉窟の跡があります。これには次のような物語があります。通常「王舍城の悲劇」といわれているのが、常です。

お釈迦さまの晩年のことでした。提婆達多が遂に、お釈迦さまと仏教々団に対して反逆しました。

まず提婆達多は、ビンビサーラ大王の王子アジャセを、ひそかに幻術によって、たぶらかしました。そして、「汝、父王を殺して新王となれ、我れ釈迦を殺して新仏となん」と、そそのかしました。幻惑されたアジャセ王子は、父なるビンビサーラ大王を幽

閉するところによれば、ビンビサーラ大王は、間もなく、はりつけにあい、生身に尺余の釘を次々に打ち込まれるような残酷な死刑に處せられたといわれています。もとより狂暴な提婆達多の指揮するところで、あつたことでしょう。

次にアジャセは、母なるイダイケ夫人までも幽閉してしまいました。食も与えませんでした。夫人の侍女が、体に蜂蜜をぬって面会に行き、その蜜を与えたともいわれています。

この幽閉窟の窓からは、お釈迦さまが説法された靈鷲山の峰が、はるかに望まれました。またビンビサーラ大王が夫人と共に、足しきく参拝した石段参道も望まれました。これらを仰ぐにつけ、イダイケ夫人の胸

中は、如何ばかりであったことでしょう。

一方お釈迦さま自身も、提婆達多に命を

ねらわれては、山頂より巨岩を頭上に落し  
かけられることもありました。仏教々団は  
提婆達多によって分裂しました。お釈迦さ  
まの側に残った者の中には、提婆達多によ  
つて撲殺される者もいました。

王舎城の町中は、下剋上の阿鼻叫喚のち  
またと化しました。こうした上下の悲劇の  
中にあって、お釈迦さまが靈鷲山において、  
来世の淨土を欣求する淨土三部經の中の、  
大無量壽經を説かれた、といわれるのです。

アジャセ王は、遂に罪を懺悔し、父ビン  
ビサーラ大王の志をついで仏教を外護する  
檀越となりました。

然しあジャセ王にとっては、もはや王舎  
城は、いまわしき思いのこもる都となりま  
した。そこで都を北門の外へ移し、これを  
新王舎城と名づけ、それまでの王舎城を旧  
王舎城とよぶようになりました。

現在、旧王舎城は前にも述べましたよう  
に人家もなく、荒涼たる遺跡の原野にすぎ  
ませんが、新王舎城には人家もあり、また  
旧王舎城の仮蹟復興にそなえて、北門の近  
くには最高級ホテルと中級ホテル・一般ホ  
テルという三つの大ホテルが建てられてい  
ます。

## アジャセ王の傳説

アジャセ王も、さすがに犯した罪におの  
のき、良心の呵責に堪えられなくなりまし  
た。提婆達多にそそのかされていた仏教々

## お釈迦さまの遺言と アジャセ王の発願

お釈迦さまは八十才の一月十五日の夜半  
クシナガラ城外、キレン河のほとり、沙羅双樹のもとで御入滅されようとする時、常

隨の弟子阿難尊者に問ひに對して、次のように答えられました。

教を信奉する八人の王さまに分骨され、それを信奉する八人の王さまに分骨され、そ

れました。

「阿難よ、そして私の弟子たちよ、お前たちは私の死後、私の遺骨を供養することに心をわざらわしてはならない。お前たちはたゞひたすらに如来の第一義をきわめ、これが多くの人々に説きひろめるがよい。私の遺骨は、信仰深き在家の人々が、厚く供養するであろう。」

果せるかな、お釈迦さま御入滅後、遺骨が荼毘されて後、仏舍利はお釈迦さまの遺言通り、僧団に渡されず、インド各国の仏塔であったことは申すまでもありません。

その中の第一の仏塔が、インド最強国マガダの大王アジャセによって建立された仏舍利塔である。また一方、お釈迦さま御入滅後、僧団の中ににおいて、まず第一に着手されたのは、釈迦十大弟子の中の第一人者である大迦葉尊者を上首としてなされた經典の結集でした。

これを仏教史上、第一結集といふのです

が、この時の施主も、ほかならぬアジャセ大王であったのです。

アジャセ大王は、お釈迦さまの晩年、提つたことでしょう。

接連多に幻惑されて、お釈迦さまと仏教を  
由にそむく大罪を犯しましたが、よくその  
罪を悔し、仏滅後における仏舍利塔建立  
と經典結集という不滅の大事業を完成した  
のでした。こゝにアジャセ王の懊悔が、如  
何に深いものであつたか想像されましょ  
う。

### 靈鷲山の仏舍利塔

そしてお釈迦さまを失つた多くの佛教徒  
は、深い悲しみの中にも、この仏舍利塔こ  
そ、お釈迦さまの姿そのものと仰いでは、  
法華經・寿量品の中に、

衆見我滅後、廣供養舍利

咸普懷恋慕、而生渴仰心

「衆、我が滅度を見て、廣く舍利を供養し  
ことごとくみな慈暴をいたいで、渴仰の心  
を生ず。」

アジャセ大王が仏舍利塔を建立した所は  
マガダ国の首都王舍城外、五大山の中の靈  
鷲の第三峰、地上およそ二五〇メートルの  
山頂でした。

アジャセ大王が懊悔と讚歎の真心をこめ

インド最強の国力をあげて建立したこの仏

舍利塔は、如何に莊嚴をきわめたものであ

「衆生既信伏、質直敷柔撫、  
一心欲見仏、不自惜身命、  
時我及衆僧、俱出靈鷲山」

—46—

転に、一心に仏を見たてまつらんと欲して  
みずから身命を惜します。時に我れ及び衆  
僧ともに靈鷲山に出す」  
と説かれている通り、仏滅當時の人々は  
この経文を文字通り実感していたことでし  
よう。

然し、この仏舍利塔も、インドにおける  
仏教潰滅とともに、崩壊してしまって、今  
は当時を偲ぶ面影もなく、空しく礎石のみ  
が風雪にさらされているばかりです。  
蓋し、ここで思い起されることは、日蓮  
大聖人が弘安五年の秋、池上宗長の邸にお  
いて御入滅されんとするに当り申された  
お言葉です。そのお言葉を波木井殿御書の  
中には、次のように伝えてあります。

「釈迦仏は、天竺の靈山に居して八箇年法  
華經を説かせ給う。御入滅は靈山よりウシ

トラに当れる東天竺クシナ城、バツダイ河  
の純陀が家に居して入滅なりしかども、八  
箇年法華經を説かせ給う山なればとて、御  
墨をば靈山に建てさせ給いき。

されば日蓮も、かくの如く、身延山より  
ウシトラに当りて武藏の国、池上右衛門の  
大夫宗長の家にして死すべく候か。

たとい、いやすくて死に候とも、九箇年  
の間、心安く法華經を説誦してまつり候  
う山なれば、墨をば身延山に立てさせ給え。



名古屋市春彼岸一週間講演中  
旅館四海波において 記

信 仰 相 談 室

青年よ法華經の  
思想と祈りをもて

最 終 回

解説 日 高 白 象

人間の脈々たる精神思想として

活用されないような教理教学は、  
たとえ深遠高邁なるものであつたとしても、

所詮たゞ單なる観念の遊戯にすぎない。

また正しい人間精神は、  
遂には正しい祈りとして昇華する。

祈りとは実践である。

実践なき祈りはありえない。

実践は常に新しい。

新しい感動がともなわねばならない。

古き皮袋に、新しい酒を盛るが如く、

伝統ある祈りの中に、

たゆまさる実践を

常に新鮮な感動をもって遂行せよ。

「創価学会の動向と日蓮宗青年運動の在り

H

方

という大きな問題に対し、これまで毎号本誌に解答を連載して来ましたが、今度は、その四回目、最終回の解答です。

先月号では「日蓮宗青年運動の在り方」という項の中、特に「宗門の組織」ということについて、

「日蓮宗全国六千ヶ寺の各寺院の独自性を活かしながら、しかも宗門全体の強力な組織活動を生み出すには、一体どのようにすればよいか」

という提唱のもとに、その解決の一案として、法華經の經文に照して、

「理論、理屈は後廻しにして兔も角も、宗門寺院、檀信徒が地区的に打って一丸となって、但行札挂、讃歎宣令の街頭布教を開することである」

という線を打ち出し、誰でも参加するとの出来る集団的対外布教の中に、各自の自行と、団体の融和組織が、しかも感動的に創造される、ということを述べたと思します。もとより、この実踐行動の中核となるものは、宗門の青年でなければならぬということは言うまでもありません。

腰はまがり、白髪のまじった年寄り団体による街頭布教、その労苦は賞讃すべきであります。それよりも若々しい青年団体による街頭布教の方が、より激励としており、また対外的にも、より効果的であることは事実です。

まして宗門組織の中でも、特に青年組織を有機的なものとし、これを活発に展開する上において、街頭布教が具体的な最良の案の一つであるとするならば、その中核は

青年団体でなければなりません。

最近、日蓮宗門内においても、各地に青年運動が活発になって参りました。その中には、青年僧侶だけの青年会もあれば、在家青年信徒を中心とした青年会もあります。

然し、最も望ましいことは、青年僧侶が僧侶だけの青年会の中で、互に行学を研鑽しながら、それぞれ在家青年会を組織してこれを指導することであり、また青年僧侶が協力あって、それぞれの在家青年会を指導したり、更には僧侶の青年会と在家の青年会とが一体となって、座談会や講習会、乃至は街頭布教、その他の行事を行うことです。そして屡々行うことです。

僧侶だけの青年会であるならば、立場がみんな同じであるだけに、運営も左程つかしくはないでしょうが、然し、それだけ

に互に妥協し易く、自己満足に落ち入りやすいばかりでなく、青年運動としての本来の意義と力を、充分發揮することは出来ません。

従って青年僧侶は、僧侶の青年会ばかりでなく、いな、それはなくとも、妥協なき情熱と迫力をぶつける大衆教化活動のため、どうしても在家青年を指導する場をもち、常にそういう場をともなっておかねばならないのです。いうまでもなく、その場とは在家の青年会のことです。

信仰の集いを楽しむ在家青年は、指導者が勧誘しなくとも、必ず友から友へ、互に友人をさそい、また未信の青年も伴つて来るものです。

その時、青年僧自身に、そうした在家青年を指導する力をもっていなければなりま

せん。少くとも、そういう力をもつように

であるからです。

努力していかなければなりません。最少限度青年たちと、共に悩み、共に苦しみ、そして青年の一人一人の上に祈らずにはおれない心だけは、もっていなければならないのです。若し、そういう祈りさえもなく、「在家青年の指導はむつかしい」

といつて投げ出す僧侶がいるとするならば、その人は既に、僧侶としての資格もなければ、既に信仰している年齢の人々に対して、さえもうわすべりな指導か、或は偽謗的な指導しかしていらない人、といわれねばなりません。

何故ならば、人に捧げる祈りそのものには、年令の相違も、理論も理屈もないからです。布教とは、自分自身がたもっているところの自己の信仰を、人々に伝えること

祈りなき布教はありません。祈りなき青年運動はないのです。青年と共に悩み、共に悲しみ、たとえ身は浅学薄才、不徳のものであつたとしても、青年の一人一人の身になり代り、その悩み、その悲しみを、み

ずから背負って仏天に祈るという、そういう涙の祈りの中からこそ、うるわしくも底力ある青年運動が湧き起つて来るのです。たとえば十軒の信徒の家に、それぞれ一人の青年がいるとします。その十人の青年は、或は無神論者であり、或は信仰を嫌っているとしても、その十人の青年の一人一人に対しても、法華經信仰を伝えようと奮闘し、日夜青年のために祈願をこめて御覧なさい。

仮に毎日一人の青年に対して自我優十巻

をもって祈念するとするならば、毎日百巻の自我偈を読まねばなりません。それはつらいことです。毎日これを持続するとなれば、血涙をしぶる思いもするでしょう。

「頼まれもしないのに、馬鹿馬鹿しいことだ」と言いたくなるでしょう。然しそれでも誠心をふるい起し、あるいは起して普願祈念をつゝけて行くならば、その誠心は必ず

仏天に通し、或は青年の先祖の靈に通じ、仏天が先祖が、その青年を信仰へ導いてくれるものなのです。いな、それをまたなくとも既に青年自身の仏性が、誠心にゆり動かされることでしよう。

こうして青年の一人一人が信仰にめざめやがて信仰を本とした青年の集いが起きて来ます。青年はまた、自分自身が祈念され

たように、他の青年にも普願祈念して行くでしょう。因果の道理は、こゝにも起きて来るものです。

布施を前提とした経を読むのではなく、こうした無所得の信仰によって、正法は正法として人から人へと伝って行きます。これが広宣流布の過程であります。この過程は、そのまま青年運動にもあてはまることがあります。

はじめは、たとえ四人でも五人でも乃至十人であつたとしても、正法を受持する青年の集い、それは何と心強いことでしょう。そして一人一人にウチワ太鼓を賣わせ、街頭の擊鼓宣令に参加させるのです。打つて一丸となつて対外的に祈るこの普願行によって、更に一層、青年の信仰は深められ、強められて行くことでしょう。

僧侶に祈りさえあれば、青年運動は誰にでも出来ないことはありません。むしろ一方的にこりかたまつたような年齢の既成信者を指導するよりも、むしろやさしく楽しむものではないでしょうか。

「僧侶の話しても進めて行くほかはない」といったような考え方をする傾向もあるようです。

然し、こうした考え方は、本末顛倒も甚しい錯覚であって、そういうことでは最早指導性を失った単なる迎合にすぎません。

ところが在家青年会を指導するに当ってことさらかまえて、在家青年むきの楽しい行事、たとえばハイキングだとか、レコード・コンサートだとか、そういうた種類の

リクリエイションを重要視して、却って運営に思いわずらっている人もいるようです。従って青年会の運営にあたっては、迎合でなく、あくまでも信仰に関する指導教化を中心として、リクリエイションは第二義的なもの、むしろ青年自身が余暇に考え出すものとしておかねばならないと思います。

「今どきの青年は、リクリエイションを中心にならなければ、お寺なんかに集つて来もないだろう。そこでリクリエイションによって青年を集めて、その中、少しずつ信

仰の話しても進めて行くほかはない」

従って青年会の運営にあたっては、迎合でなく、あくまでも信仰に関する指導教化を中心として、リクリエイションは第二義的なもの、むしろ青年自身が余暇に考え出すものとしておかねばならないと思います。

正法まさに尽滅しようとしている緊迫し

を現代社会をかえりみる時、リクリエイションなどに費す時間など考えられないことです。

といつてリクリエイションを、全く否定しようとするものではありません。【「あくまでも正法の開顕宣布を第一義としてリクリエイションなどを第二義的なものとせよ】

というのです。

但し、リクリエイションによって第一義の道が、むしろ、ますます高揚されるならば、これにすぎたものはありません。この際、注意しなければならないことは従であったはずのリクリエイションが、とかく何時の間にか、主になってしまいがちであるということです。

「量と質」という言葉がありますが、青年

会においても、青年の量と質が何時も問題になっています。量を主とすべきか、質を主とすべきであるか、ということになれば、いうまでもなく質を主とすべきであります。然し同時に量として初心の青年の一人でもないがしろにしてはなりません。

シリハンドタといったような精薄青年ですらお釈迦さま在世当時、アナン尊者よりも先きに仏知見の道に入ったといわれてゐるほどですから。

要は、指導者の指導如何によるものです。青年会も単なる機構でなく、人間が人間完成をめざして集っている人間の団体なので、から、指導者の信仰、人格、見識というものが、どうしても中心となり、中核となつて参ります。

法華經々典の中では、法華經をたもつ者

を地涌の眷属と申しておりますが、その団体は眷属という言葉によって表現されています。

眷属とは、いかにも古めかしい言葉ですが、指導者と指導されるものは、あたかも針と糸の関係にあります。針がまがって行けば、糸もまがって行きます。青年会も指導者によって、どのようになるものです。青年会が人格体であるだけに、指導者の責任は重大といわねばなりません。然しそれは青年会に限ったことではなく、一般檀信徒の場合でも、その道場に変りはありません。

「給仕第一、信行第二、學問第三」  
という宗門清規が、そのまま青年指導の上に必須の指針であるということは、前回

にも述べた通りですが、青年の信行を中心とする三宝報恩給仕の次に、問題となるのは教理、教学問題であります。

例を創価学会にとれば、学会の青年は、富士大石寺教学を猛勉強しています。この勉学に拍車をかけるのは、学会の教師過程ですが、然し教学は、あくまで日蓮聖人の開顕された正しい法華経の教義にもとづくものでなければなりません。

然し、教学が如何に正しくとも、また如何に深遠なものであつたとしても、脈々として人間の精神、思想として生かされなければ壁にえがいた餅にすぎないのであります。

ここに日蓮宗青年に教えるものが、たゞ単に大学で教えるような理論教学の域にとどまらず、青年の実践を裏すける思想として普遍されねばならない急務があります。

たとえは難解な本尊論にしても、それは究極の人間理想像を語るものであり、成仏論は、そういう人間形成の過程を語るものであり、また戒檀論は、理想国家の創造を語るものでなければなりません。

お釈迦さまや日蓮聖人の生涯を讀えるにしても、そうした人格が如何にして形成されたのか、またそうした実践が何故なされねばならなかつたのか、という所まで追求されなければ、青年の向学心をみたすことには出来ないであります。

この場合、在家青年の心に迫るものは、

仏教徒として、日蓮門下として、指導的立場にある者の、日頃の実践と体験であることはいうまでもありません。

何となれば青年は、身近かにいる指導者の信仰を通して、或はその信仰を契機とし

て、お釈迦さまや日蓮聖人を仰ぎ、その教えを仰ぐものであるからです。

青年は純粹であろうとします。それだけに反抗的でもあり、妥協や偽躊躇は許しません。そして卒直であり、実践的です。こゝに指導者の厳しい自己批判が起ります。

未完成ながらも、未完成であるだけに、厳しく自己を批判しつゝ道を追求しつゝける指導者の姿にこそ、在家青年は共感し、或は奮起するのではないでしようか。

## K

これを要するに「日蓮宗青年運動の在り方」を追求するならば、必然これを指導すべき立場にある「宗門青年僧侶の在り方」

ということに要約されるのです。  
今日、宗門における在家青年運動をみれ

ば、全く敵たるものにすぎません。いふなれば宗門青年僧侶の怠慢に帰因しています。在家青年運動を活発にしなくて、どうして明日の正法興隆を期すことが出来ましょ。腐敗、枯渇しようとしている宗門を蘇生することが出来ましょ。

劇場学会の批判も結構です。然し、いくら批判のみしていても、学会の青年行動隊に対するような宗門青年活動を起さなければ、何の力にもなりません。まず青年僧侶自身が、在家青年運動を目標として、みずから蘇生奮起することです。そして学会折衷をするとするならば、むしろ在家青年によってやらせる方がよいでしょう。否それほどの力と勇気のある在家青年会を育成して行かねばならないのです。

青年僧侶よ、まず誓願を起せ。在家青年

活動をめざして檀信徒の中に、兎も角も四人の青年信徒を結集せしめよ。四名とは実は仏教僧侶の原型なのです。

この原型を母胎として青年会は、祈りと実践の中に拡充されて行くことでしょう。人をたのまず、汝一人、我れ一人が、決起することを思い切るのです。思い切って奮起する時、幾多の苦難は、たちどころに戦り起つて参ります。

然し、その苦難を克服する涙の祈りの中にもみずから滅罪と、明日の仏法興隆が約束されましょ。

日蓮聖人の諸法実相妙に云く、

現在の大難を思い続くるにも涙未永の成仏を思うて

喜ぶにも涙せきあえず

鳥と蟲とは鳴けども涙おちず

日蓮は泣かねども涙ひまなし

この涙は世間のことにはあらず

たゞひたすらに法華経の故なり

若し然らば甘露の涙ともいふべし

行学の二道を勵み候べし

行学絶えなほ仏法はあるべからず

我れも致し、人を教化候え

行学は信心より起るべく候

力あらば一文一句なりとも

かたらせ給うべし

日蓮謂「下青年の在り方は、煩瑣、難解な

教學はさておき、大まかに法華経の思想大

系を理解して、乃至一人の上にも純粹な祈

りを捧げることであり、青年僧侶を拡充し

ては、立正安國運動を社会的に実践して行

井上清純先生著

日蓮聖人 六大部 疏

御遺文

A五判九〇〇頁

定価二五〇〇円（送料共）

本書は、日蓮聖人の教義を現代に顯現すべく、該博なる造詣と、憂國の至情をもつて立正安國論、開目分、觀心本尊釈、撰時釈、報恩釈、三大秘法外を講義した權威ある書にして、各界の識者、並に有為な青年必読の名著である。

発行所 誠文堂新光社

東京都千代田区神田錦町一の五  
振替（東京）六二九四番

第五次身延山布教別動隊  
九州街頭布教紀行

その二

明治の傑僧 山本日諦上人伝

これは身延山学生布教隊が九州街頭布教  
初日の夜、宿泊した八幡の龍潛寺において  
はじめて聞くことの出来た開山山本  
日諦上人の伝記の概要である。

編集部

立正世界平和、創価学会折伏の一大スローガンをかゝげた九州街頭布教の初日、それは身延山としては初めて九州に街頭布教隊をくり込んだ記念すべき日であったが、この日、早朝より夕刻に至るまで、北九州寺院檀信徒の総力を結集し、寸暇も惜んで門司、小倉、八幡と続く三大都市において遺憾なく日蓮宗の精華を発揚したことは、前号に報道した通りであるが、なおその夜身延山布教別動隊二十八名が宿泊した八幡の龍潛寺において、住職松尾周輝師が布教隊一同に対して語られた龍潛寺開山、山本日諦上人に関する伝記は、かくれた明治の傑僧のおもがけを偲ぶものとして、その日の外的な街頭布教における爆発的感動を、更に内的に深めしめる感動をかいものであつた。日諦上人伝記の概要是、およそ次の

如くであつた。

## 十六

山本学静（がくじょう）後の智玄院日諦上人は、天保十二年四月七日、筑前遠賀郡前田村（今の福岡県北九州市八幡区前田；龍潛寺の近く）に生れた。家は念佛信仰の農家、その次男であった。

弘化二年五才の時、母に死別し、その後は繼母に育てられた。繼母は鬼のように冷たく厳しかった。繼母の苛責がひどければひどいほど、生母に対する恩義の情は、日々につのって行つたら見るに見かねた親族の人々特に生母の里の人たちが、ひそかに里へつれて帰つて、かばつたことも再三ではなかつた。

弘化四年七才の春、たまたま生母の里の

祖母にともなわれて、隣村のお寺に詣でた。丁度お寺では六道輪廻、地獄、極楽の様相をえがいた掛絵軸が開張中であった。

その絵を見た時、地獄のすさまじい様相に幼い日諦少年は恐怖した。そしておのゝきながら、そのわけを祖母にたずねた。

祖母は悲痛な声で言い聞かせた。

「これは血ノ池地獄だ。お前の母さんはお産で死んだので、多分この血ノ池地獄におちて苦しんでいることだろう。」

おそらく祖母は、出血のはげしい出産のしかもそのお産の中に苦しんで死んだ人の姿を、そのまま死後の血ノ池地獄に連想したのであろう。

然し祖母の、この一言は、日諦少年にとっては、あまりにも強い衝撃だった。夢にも恐れることの出来ない慈しい母が、まさ

か、このような地獄におちて苦しんでいようとは……日説少年は驚きと悲しみのあまり、その場に倒れて、懨畏すること数時間にも及んだという。

このことがあって以来、幼な心に焼きついたものは、苦界に苦しむ母の靈を、如何にして救済出来るか、ということであった。そしてその心は、そのまま出家の志となつて行った。

然し、頑固な父、邪険な繼母の反対にあり、親族を介した出家の願いも、一度にわたくつがえされた。

嘉永六年の春、遂に意を決し、父母にそむいて家を出、叔父大和治三郎とともになつて小倉の立法寺第二十七世、方端院日相上人の門に投じた。時に十三才。

ここで修行すること三年、安政三年一月

然し、惜むらくは既に日輝上人は遷化さ

十六日、宗祖降誕の聖日を期して、単身遊学修行に旅立った。時に十六才。その心中深く期するところは、

「我れ念佛篤信の家に生れ、父母にそむいて法華の僧形となる。まず第一に父母を教化して改宗せしめねばならぬ。第二には生母の靈を苦界から救わねばならぬ。第三には師匠の大恩に報しなければならぬ」

といふことであった。

立法寺の恩師、檀越に見送られ、小倉の長浜海岸より船に乗り、第一歩を踏み入れたのは松ヶ崎の櫻林であった。

ここで止嘗断眠の行學を勵むこと三年、更に當時、学徒共に一宗を風靡していた便れで、小倉の立法寺第二十七世、方端院日陀那院日輝上人をしたって、金沢立像寺の充治園へ向った。

れたあとだった。そこで充治園に留まるこ  
と数ヶ月、優陀那院独歩の遺風を身に体し、  
更に静岡県玉沢の妙法華寺を訪ね、時の貴  
首、教政院日暉上人の門をたずいた。

然し、修行に明け暮れる日諦青年の姿は、

あまりにもみすぼらしかった。ために役僧  
は、日諦青年を門外に放逐した。然し日諦  
青年は屈しなかった。釈尊在世時における  
シユリハンドク尊者の故事にならい、竹ホ  
ウキで庭を掃く調子にあわせて長題目を唱  
えこれを三日二夜、しかも断食行をもつ  
て継続した。

このことが日暉上人の耳に入った。上人  
は大いに感嘆し、門内に招き入れ、師事す  
ることを許した。  
またまた玉沢で修行すること一年有半に  
して、小倉立法寺の恩師日相上人が遷化し

た。日諦上人は急参帰省して葬儀に列した。  
そして再び日暉上人の座下に斬せもどった。  
時、日暉上人は日諦上人の逸材を惜み、推  
举して新居日蔵上人に紹介し、教えを乞わ  
しめた。

日蔵上人は優陀那院日暉上人の高弟、當  
時、江戸小石川の蓮久寺にあって遺業を繼  
承し、宗門の内外をとわす、名実ともに日  
本佛教界の第一人者であった。

日諦上人は、日蔵上人の門に入り、乞う  
て附弟となり、師事すること五年、その刻  
苦精勤は言語に絶するものがあった。

日蔵上人も深くこれを賞した。そして遂  
に恩師大車院老師に紹介し、その弟子に推  
举して、みずから日諦上人と法の兄弟とし  
て契り結ぶに至った。

その後、老師の命をうけ、千葉県經王寺

に住し、飯高櫻林に遊び、兼ねて助講もしていった。

蓋し、日諦上人遊學中、幕末の頃から、明治の維新にかけては、大政奉還と共に時代は急変していた。

海外の文化文明は、怒濤の如く流れ込む一方、国粹運動は狂奔し、仏教界には廢仏毀釈の嵐が吹きまくっていた。

新仏は分離し、僧位僧官は徹廃され、幾

多の寺院は統々破壊されて行った。この時その矢おもてに立ったのが、新居日蔵上人であった。

然し日蔵上人が活躍したのは、どちらかといえば僧道の復興という内面的なことよりも、むしろ廢仏毀釈の動乱をより仏教を救うという対外的な政治上の面であり、それ以外に主力を注ぐ余裕のないほど時代は

は逼迫していた。

ひるがえって日蓮門下の状態をみれば、門下の諸本山は門流ごとに分裂し、僧侶は自己を守るにキユウキユウとして名聞利の犬と化し、僧道は全く地におちて時流に對処する力もなく、人心を教説することは愚か、指導する指針も意欲も失い果て、まさしく仏教は、内外ともに潰滅の危機に陥っていた。

時代の苦惱　宗門の苦惱　それはそのまま日諦上人の苦惱であった。そして僧道の退廃を歎き、その復興のため血眼になつていた日諦上人が、かねてより思慕していた深草の元政上人の草山集をひもどいた時、譲然として頓悟するが如く見出された一つの道があった。

それは、

「我が身命を仏天に托し、草山の流れを汲む極度に混乱していた社会と、腐敗し切つてんで、山籠入行し、我が一人の身をもって、いた仏教界、特に日蓮門下の実態を、誰よしても、僧道の復興・護持に当らねばならぬ深く熟知していたればこそ、もはや僧道を棄し、僧道を蘇ることを他に期待する

ない」

ということであった。

もとより日蓮聖人が、開目録の中で、「たとい山林に交って一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を知らず、摶折の二門をわきまえずば、いかでか生死を離るべき」と諷められていることを知らないはずはなかつた。

故に「身命を仏天に托し」てまでも草山元政上人の遣された僧道を復活しようとしたのである。ここに日蓮上人が山林にこもらねばならないほど、如何に社会が混乱し、仏教界が腐敗していたかを窺ふことが出来よう。

それにもかゝわらず日蓮上人が、山に籠るうじた所以のものは、末法という時機を知らなかつたわけでもなく、また摶取、折伏の法門をわきまえていなかつたわけでもなく、むしろこれを了知し、更に当時の道場を求めることが出来たのである。ここに日蓮上人は、深山幽谷に清淨な道場を求めることが二年に及んだ。然し何処

遂に元治元年十一月二十九日、生きて再びまみえることも出来ない荒行に入るべく両親、親族にながいいとまを告げようとして故郷九州へ下った。

時に二十四才。

然し、父母の怒りは依然として解けず、一步も生家に入ることも許されなかつた。やむなく親族の家に起居して旬日の間、先祖の墓に詣で、亡き生母の冥福を祈り、十三才の時一人仏門に入ったように、再び孤影わびしく故郷を去つた。

行く先きは広い三界の中、もはや身延山しかなかつた。途中、京都によつて元政上人のお墓に詣で、元政上人の遺風再興を誓つた。

身延に到つては、祖廟に参籠戒行十年の音願を奉上した。そして同じく元政上人の

流れをくむ本妙院日臨上人の、戒行道場として有名な、七面山の裏山に当る雨煙の滝を、参籠の道場に定めようとした。

然し、そこも既に俗化の形跡があつた。

やむなく身延山にとって帰えし、奥之院思親閣へ登る参道二十五丁目の、三光堂に参籠した。参籠いくばくもない頃、身延の近郷、内船村倉ヶ平の住人、四条庄右衛門と会した。

庄右衛門は日諦上人の志を聞き、倉ヶ平の滝を案内した。こゝは現在の身延駅から富士駅へ向う一つ目の内船駅を降りて、富士川とは反対の方向、山の中へ一、三里ばかり入つた所、今でもそつであるが遠く俗塵より離れた深山幽谷であつた。

日諦上人の戒行の道場は、遂に与えられた。直ちに雨露をしのぐに足りる三層敷き

ほどの、柴の草庵が結ばれた。時に慶応二年一月十六日、日蓮聖人御降誕の聖日、日諦上人二十六才の春だった。

これより常人の想像も出来ない苦修練行が始まった。常に滝にうたれ、夜は寝具も用いず、代りに渋紙一枚を身におい、食糧の乏しい時は断食もつづけ、三七日の懺法の行、百日間の別行も続行した。

この修行は、たちまち近郷の評判となつた。人々は次々に信伏し、明治元年には六坪の堂宇が建立され、入門する者、數十名を数えるに至り、明治四年九月には更に本堂、庫裏、学問所の三棟が落成、明治五年には近郷の井出村が一村をあげ改宗した。

所が、その年の末、戸籍法条例が政府より発布されるや、日諦上人は、「我れは出家の身なり。俗籍を有せざるは

仏制の然らしむる所、これにそむくは仏道にあらず」

と再三にわだって県当局の督促する戸籍調査と入籍をこぼんだ。このため翌年の春、維新の政道に違背した罪に服し九十日の入獄の上、所を追わされて故郷九州へ強制送還され、また日諦上人に従った信徒の代表数名の者も、苦打ちの体刑に処せられた。かくて超人的な倉ヶ平山籠七ヶ年の戒行は幕を閉じた。時に上人三十四才。

送還された上人は、出家以来二十年にして、はじめて生家に入るを許されたの幸い生家を道場として、直ちに四ヶ格言による折伏布教の法陣をはつた。

上人の故郷は、郡内一ヶ寺の法華の寺院も教会もない念佛の地盤だった。ために法

人は、弥陀の怨敵とばかり、よってたかって上人を迫害した。罵詈雜言はいうまでもなく、石や瓦は投げつけられ、遂には上人生家の家屋までも破壊された。

如何に上人自身にあっては、もとより法難寛倍の上であつたとはいえ、老いた父母親族の人々の嘆くのをみては、七日間の予定であつた破邪顯正の剣も、五日でおさめねばならなくなつた。

不本意は、そればかりではなかつた。今や五尺の体一つ、置く所もなくなつた日諦上人は、老父不在の夕暮れ、夕やみにまぎれて一笠一杖、行方も定めず旅立つた。

所が、その道すがら程もなく、遭縁に当る上野与一郎と行きあつた。たまたまその日は与一郎の亡父一周忌の遠夜であつた。日諦上人は、乞われるまゝに遠夜の読経

厳しい修行と興学布教に、法戰の拡充し

回向をした。その時、隣家に住んでいた日諦上人生母の実兄に当る上野卯六が危篤におち入つた。

更に会われて卯六の臨終の経をよめば、卯六も歡喜合掌して高声にお題目を唱え、

七十七才を一期として安祥として逝去した。

翌日は与一郎宅の一周年法要、集つた親族一同は、誇々として説く日諦上人の法話に信伏しない者ではなく、つゞいて卯六の葬儀には、日諦上人みずから導師をつとめ、これを縁として与一郎の屋敷内の二間四面のお堂を道場として、再び活発な折伏布教が展開されるに至つた。

その布教の中にあって、倉ヶ平七ヶ年の参籠修の残り三ヶ年の修行が、近くの山中

荒谷の滝において再開された。

ないわけはなかった。遠近の信徒は陸續と  
して上人の下へ集って来た。

与一郎は進んで一町五反十八歩の土地を  
寄進した。信徒は協力して三十疊敷きの道  
場を建立した。ついで五十疊敷きの本堂  
も建立され、こゝに龍潛寺の基礎がつくら  
れた。

明治十年、時の日蓮宗管長新居日薩上  
人の特選によって、日諦上人は大本山小湊  
誕生寺第五十八世に晋山した。時に上人三  
十七才。この年で大本山の貫首に累進する  
とは、まさしく異例の特選であった。こゝ  
にも日諦上人の道念と僧風が如何に崇高な  
ものであったかが推察されよう。

然し上人は、少しもおごる所はなかつた。  
修行時代と同じ粗衣、粗食に甘し、みずか  
ら法鼓をうつて街頭に出た。

「いやしくも大本山の貫首さまであられる  
お方が、千ヶ寺参りの乞食のような修行を  
されては、大本山の体面にかゝわる」

と諫る者も少くはなかつた。然し上人は  
断呼として初一念をつらぬいた。上人の任  
務の第一は、荒廃した山門を復興再建する  
ことにあった。

上人は寺門復興の道を、みずから修行  
と布教を兼ねた街頭擊鼓宣令の菩薩行に求  
めたのであった。

この時、誕生寺に修行する一人の青年僧  
がいた。これが後に日蓮宗管長、池上本門  
寺貫首となつた酒井日慎上人であった。若

し、この時、その青年僧が日諦上人にあう  
ことがなかつたならば、今日の酒井日慎上  
人はなかつたのであろう、とまでいわれて  
いる。

小湊に在任することと剪後六年、布教大い

に興り、寺門も一新して、宗祖六百遺冠も盛大に営み、これを名残に明治十五年の冬、大本山の榮職をすてゝ九州の故山へ引退。時に四十二才、これより龍潛寺を中心とした二十有余年の行化生活に入ったのである。上人は、深草の元政上人の遺鉢をつぐものとして、その生活態度は歎正をきわめ、僧道の地におちた当時、一人身をもって、これを守り通した律僧であった。

生產、妻を帯せず、法衣も地味な元政衣であり、食事も純然たる精進料理、ソバのツユにもダンを用いず、朝はカニ、夜昼は一汁か一菜の麦飯。三宝献供の靈膳も、上人みずから調理した。また信徒と対応中、信徒に喫煙、喫茶も許さず、轟るところは法門を主とし、世間話しは絶対にしなかつた。

上人の最も力をそひだのは、人材の養成と布教、そして寺門の經營であった。弟子の常住すること十数名、朝勤は、夏は三時、冬は四時より始められ、元旦三日と春秋彼岸の大法要は終日看經され、また必ず懸法会が修せられた。

明治二十三年、五十才の春二月十九日、大本山池上本門寺特選住職の辞令が、時の管長より下った。然し上人は、亡くなつた新井日薩上人の遺志は、学友の久保田日角上人についたことにより、これを固辞して受けなかつた。

上人は明治三十八年七月二十四日、六十五年の生涯を、僧道の復興に賭して終つた。この間、寺院建立すること二十六ヶ寺、弟子八十名をこえ、信徒に授与した大マンダ

ラ本等は數千幅、教化は全国に及び、倉ヶ

平の山奥の、曾っての修行場には、今なお

毎月信徒は集り、日諦上人の本像を安置し  
て信仰を伝えている。

なお上人が信徒に与えた手紙の中に、次  
の言葉がある。

一切の男子を化して

法華經をたもたしむるは

これ父の恩を報せんがためなり

一切の女人を化して

法華經をたもたしむるは

これ母の恩を報せんがためなり

しき深い感動にうたれ、襟を正さない者と  
てなかつた。

既に時計の針は、夜中の十一時近くなつ  
ていた。明日は九州街頭布教第二日目、日  
高隊長は日諦上人使用的仏間に、学生隊員  
は書院に、それぞれ分散して寝に就いた。  
然し感動の余情に、なかなかねつけなかつ  
た。床の中で学生が語っていた。

「オレたちも、やろうな、日諦上人のよう  
に・・・」

「九州布教が終つて身延へ帰つたら、是非  
とも倉ヶ平の滝へ修行に行こうよ」

(以下次号)

## 十 七

龍潛寺住職松尾周輝師の語る開山・山本  
日諦上人の伝記は、おゝむえ以上の如くで  
あつた。聞き入る身延山布教隊の学生、等



## 読者之声

### その二

横浜市

鍋島

三智子

世の中の人々が皆、驚峰誌にのっておられるような方々ばかりならば、この世の中は、もっと美しく、そして住みよいであろう、と驚峰誌を愛読することに、つくづく思われしめられます。

驚峰誌、月を追って、ますます発展、内容も迫力を加わえて来ましたこと、まことに御同慶にたえません。為法為宗の御精進切に御自愛を祈り上せます。

なお発行部数も制限あることゝ思ひますが、貴重な雑誌ですから、立正大学の図書館にも一部ほど御送付下さい。保管させて欲しいと存じます。

また立正山大学図書館にも一部寄贈保管

されますよう御念考申上げます。

そして、そのような美しい世の中を創り出すのは、次の世代をになう私たち青年であり、青年のもつ正しい宗教である、と生意気のようですが、確信する次第です。

現在、犯産しているいかゞわしい雑誌にくらべ、まるで汚れた心を洗ってくれるような素晴らしい驚峰誌。。。

この驚峰誌が、日蓮宗の青年ばかりでな

く宗門外の多くの人々にも読まれて、日蓮聖人が説かれた美しい世の中が、一日も早く実現しますように、と祈らずにはおれません。私は生涯、鷺峰誌を愛読させて頂きたいと願っています。

### その三

四日市市

伊藤清

鷺峰三月号、巻頭の言葉「光と力」から一〇五頁の「編集後記」にいたるまで感激をもって何度も何度も熟読させて頂きました。特に「九州街頭布教紀行」の文中、創画学会に対する折伏には、心から力強いものを感じ、喜びにたえません。

私も昨年の夏、身延山学生布教別動隊が四日市に街頭布教を展開された時、これに参加して以来、これを契機として積極的に

創価学会に対する折伏をつづけております。然し何といっても、宗門の興隆は、宗門青年の奮起のほかはありません。鷺峰会ならびに鷺峰誌の発展、心からお祈りいたします。

### その四

長野県

丸山富治

鷺峰誌は、他の如何なる宗教雑誌にもない「深い人間の祈り」というものを、その全体の行間にも感ぜられ、まことに貴重なものと存じます。

法華經は仏陀の悟りの内容を、教理的に展開する至難さを排して、人間菩薩行の実践の中に、おのずから仏陀の悟りの内容が体得されるように説かれておりますが、鷺峰誌もまた、信仰実践、現誠体験の中に、

さしも難解な仏教の教理でさえも、自然納得されるようだ。

い致します。

### その五

神戸市 身延山大本願人

廣田定一

が「出家の動機」には、共感おく能わざるものがあると同時に、その体験の奥に、涙なくしては読まれない「深い人間の祈り」と正しい教理にむとすく信仰の在り方に感動せざるを得ません。

また連載された宮沢賢治の「デクノボウの祈り」にも深く感銘いたしました。更に日高上人の訓説学会に対する折伏の仕方は理論面をこえて実践面において展開されており、大いに参考となりました。

私も私の地方において学会折伏の尖兵となつて戦っております。今後、鷺峰賛助会員にもつらなつて、共々に正法宣布へ邁進いたしたいと存じます。どうぞ宣教くお願ひ申します。

### その六

大阪日蓮下連合団

勝見富士太郎

鷺峰誌、且下拝讀中ですが、まことに結

鷺峰誌の刊行は、その内容とあいまって鷺峰会の実踐行脚布教と共に、宗門近年の壯舉・双手をあげて慶祝します。

特に鷺峰誌は、現代宗門青年必読の書であり、また法華經の眞実を宣揚する良書だと思います。私も機会を見て、私なりの信仰体験を書いて投稿したいと思います。

身延山学生諸君の一層の健斗を心から祈ります。

構な内容と感激しております。殊に在家信徒の共感を呼ぶものは、各自の生々しい信仰体験談です。今後とも大いに信仰体験談をお聴かせ下さい。

創刊以来の以前の号は背壳切れて残部は一冊もないとのことで、まことに残念に思っています。今後は部数も幾分余裕をもって印刷して下さい。

なお信徒必携の雑誌として発展しますよう、万信徒必携の雑誌として発展しますように紹介すべく奔走しております。宗門一千お祈りいたします。

## その七

富士宮市 清 周代

私は富士北山本門寺の片山日幹貫首さまを総裁に仰いでいる重須婦人会の一員です。

毎号の如く読者皆さまより多くの読後所感をおよせ頂き、厚く感謝しております。今後とも皆さまの御期待にそよう努力いたしますので、なにとぞ折込へガキに皆さまの御感想、御希望、御意見など御遠慮なくお書き入れ、御投書下さいませ。

## 読者の声 募集

鷲峰誌を拜読しました時、近所に配られてゐる創価学会の聖教新聞にくらべて、全く品格が違うのに本当にうれしくなりました。鷲峰誌の中におふれている身延山の学生さんたちの燃え沸る熱意と、不屈不撓の精神には、頭のさがる思いがいたします。

私も鷲峰誌によつて法華経を勉強させて頂くと共に、私のお友だちにも鷲峰を御紹介して、喜びを分ちたいと存しております。

號碼贊助會員

歌尊像の写真

本誌発展のため温かく御指導、御支援下さいます読者皆さまに厚くお礼申上げます。特に年間六十人の人々に本誌を見本として宣伝寄進する資金、年間三千円を御志納下さいました贊助会員の方々には、こゝに御芳名を御紹介申上げ、謹んで感謝の意を表させて頂きます。

|      |      |
|------|------|
| 福知山  | 大阪府  |
| 大槻喜作 | 和田龍遊 |
| 藤森觀象 | 宮本龍一 |
| 松本市  | 西宮市  |
| 市川市  | 神戸市  |
| 千葉県  | 岡見浪子 |
| 中島康恵 | 長宗良子 |
| 広野稔彦 | 佐藤定一 |
| 石井重吉 | 福知山  |
| 船橋市  | 逗子市  |
| 高城光子 | 西宮市  |
| 市川市  | 神戸市  |
| 中島康恵 | 岡見浪子 |
| 広野稔彦 | 長宗良子 |
| 石井重吉 | 佐藤定一 |
| 船橋市  | 福知山  |
| 高城光子 | 西宮市  |
| 逗子市  | 神戸市  |
| 佐藤定一 | 岡見浪子 |
| 福知山  | 長宗良子 |

川島海嗣 伊庭顯照 平塚富子 中原勝 加入下さいました數十名の賛助会員の方々  
伊庭顯照 に對し、贊助記念として本誌表紙のお祝迦  
平塚富子 さまの写真を、四つ切りに引きのばし、一  
枚ずつ贈呈送付いたしました。

|      |              |      |              |      |     |              |   |
|------|--------------|------|--------------|------|-----|--------------|---|
| 北九州  | 野田政市<br>酒井友子 | 伊藤恵祥 | 奈良県          | 藤本晃良 | 東京都 | 川島海嗣<br>伊庭顯照 | 加入下さいました數十名の賛助会員の方々<br>に対し、賛助記念として本誌表紙のお祝迦<br>さまの写真を、四つ切りに引きのぼし、一<br>枚ずつ贈呈送付いたしました。 |
| 刀弥義昭 |              |      | 大宮大貫<br>大島鳳静 |      |     |              | また今後、賛助費御志納の方々も、ごの<br>写真を御贈呈申上げることゝなっておりま<br>す。                                     |
| 松尾周輝 |              |      |              |      |     |              | 発送部   |

編集後記

號　　號　　四月增大号

昭和三十九年　第二卷第十四号  
通卷第十号

定価　五十円

昭和三十九年三月二十日　印刷  
昭和三十九年四月　一日　發行

編集兼发行人　　日高白象

印刷所　甲府市東橋町一八　天野磨写堂  
發行所　山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山寫峰会

電話（身延山）二番、三番  
振替（甲府）二〇九三番

半年分　三〇〇円

一年分　六〇〇円

贊助会費　一年三〇〇〇円（分納可）

◇好評を頂いた榎本蓮子さんの「テクノボウの祈り」と、信仰相談室の「創価学会の動向と日蓮宗青年運動の在り方」は、本月号をもつて完結しました。長い間、御愛読御声援下さいました読者皆さまには心から感謝いたします。

◇本年三月身延山大学を卒業した鷲峰会第一期卒業生の沢田、小寺、藤森の三君は、降りつゝ雨のあがるのを待ち切れず、四月十日、熊本から身延山まで全長二千キロに及ぶ長途の踏破行脚布教に出発しました。熊本からの打電に「アメノクマモトヲタナハルカナルミノブベノゾウトニツク、ガフアイジンミヨウ、キスルハグ、ボウノコウリュウアルノミ」